

● マスコット ブックス 〈2〉

バレエ シューズ

ストレットフィールド/久米穰 訳

Mascot Books



●マスコット・ブックス 2

バレエ シューズ

N.D.C. 933 216p 19cm

©Minoru Kume, 1980

発行 1980年1月 初版1刷

作者 ストレットフィールド

訳者 久米 穰

発行者 今村 広

発行所 偕成社

東京都新宿区市ヶ谷砂土原町3-5 〒162

振替・東京5-1352番

印刷 中央精版印刷株式会社

落丁本・乱丁本はおとりかえます。 Printed in Japan.
8397-630020-0904

バレエシューズ

ストレットフィールド 作

久米 穰 訳



偕成社

BALLET SHOES

by Noel Streatfeild, ©1959

Original edition published by Dent & Sons, London

Japanese edition published by KAISEI-SHA, Tokyo

arranged through Tuttle-Mori Agency, Tokyo

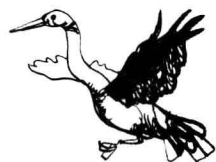
● は じ め に

神さまのお引きあわせによって、三人の女のあかちゃん、つぎつぎと一つ家にはこばれてきました。生まれも顔かたちも性格も、まるでちがうポーリンとペトロワとポージー——。「わたしたちは、歴史の本にのるようながやく星のようになりたい。自分たちの名まえを、ねうちのあるものにするよう、がんばります。」

三人姉妹は、お誕生日のたびにちかいあいます。まわりの人びとも、ひなどりを育てる親どりのように、ときにはきびしく、ときにはやさしく、少女たちをばげまし見まもっていきます。そのようすが、まるで記録映画を見るように、ありありとえがきだされています。フットライトをあびて、舞台上立つ子ども息づかいまで、じかに伝わってくるようです。

三人姉妹が、めいめいの道をきりひらいていく姿は、みなさんに、明るい希望をあたえることでしょう。

久米 稔

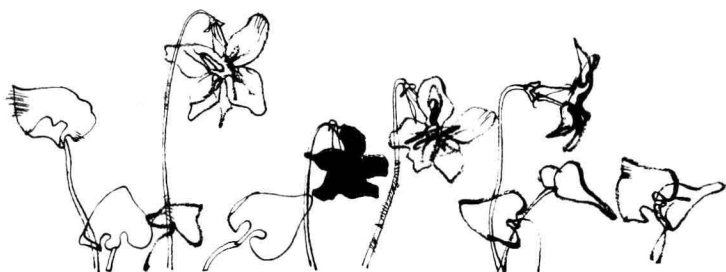


もくじ

ガムおじさんとフォシル姉妹	9
三つの首かざり	27
下宿屋さん開業	35
三人のちかい	46
はじめてのダンス	59
きれいなつま先	68
雨のち晴れ	74
チルチルとミチル	84
われるような拍手	94
ドレスが、ほしい	102



● 解 かい 説 せつ	213
それぞれの道へ.....	195
ポージーのなやみ.....	183
映画 えいが の勉強 べんきょう	174
リチャード三世.....	164
十四歳 しじさい の独立 どくりつ	154
真夏 まなつ の夜 よ の夢 ゆめ	144
ポーリンの助け船 たすけふね	136
誕生日 たんじうび のピクニック.....	130
うぬぼれ.....	121
オーデিশョン.....	108





筆者紹介

訳者 久米 稔（くめ みのもる）

1931年、鎌倉市に生まれる。文化学院文科卒業。おもに児童書の翻訳、創作につとめ、特に悲劇の少女アンネの紹介に活躍する。

住所 東京都千代田区三番町7-10

NK麹町コータース1002〒102

画家 山野辺進（やまのべ すすむ）

1938年満州に生まれる。新聞、週刊誌の小説や児童書のさし絵、絵本のほか、単行本、文庫本の装丁など、出版美術界で活躍。児童物の作品として「祖国へのマズルカ」「十五少年漂流記」（学研）「怒りのぶどう」（偕成社）など多数
住所 田無市南町3-15-1

装丁 クリエイション・ハウス

バレエ シューズ

ストレットフィールド
久米 穰 訳

●この物語のおもなひと

ポーリン ガムおじさんに、はじめに連れてこられた孤児の少女。

ペトロワ ロシア人のみなしごで三人姉妹の次女。

ポージー 生みの親はバレリーナで、さいごに連れてこられる。

ガムおじさん 三人の孤児の女の子を連れてきた考古学者。

シルビア 三人姉妹の保護者。

ナ ナ 口のうるさいシルビアの乳母。



ガムおじさんとフォシル姉妹

フォシル姉妹は、ロンドンのクロムウエル通りの、いちばんはずれに住んでいました。それは、ずいぶんと不便な場所でしたが、姉妹たちは外に出かけるとき、よほど雨がひどい日でないかぎりは、てくてくと、歩いていくのがふつうでした。なるべくむだづかいをしないためでしたが、出かけるたびに、長女のポーリンはこういうのでした。

「ガムおじさんって、きつといつも、タクシーをのりまわしていた人なのね。歩くなんてこと、考えもしなかったのよ。でなければ、こんなロンドンでいちばん長い通りのはしっこに、家を買ったりするはずはないもの。」

二番めのペトロローワの考えは、すこしちがっていました。彼女は、こういいます。

「そうじゃないわ。おじさんは、自家用車を持っていたのよ、きつと。タクシーなんかにはのるもんですか。」ガムおじさんというのは、正しくいうと、大おじマシューということになるのですが、子どもたちはみんな、そんなめんどろな呼び方はせず、^{かた}「ガムおじさん」と、呼びならわしていたのでした。

子どもたちにとって、ガムおじさんは、まるでむかし話の中の人のようでした。というのは、おじ

さんは航海に出たままで、子どもたちがものごころつくようになったいままで、いちども家に帰ってこないのです。でも、おじさんは子どもたちにとっては、いちばんたいせつな人でした。それは、ポリンが、

「おじさんは、おとぎ話に出てくるコウノトリみたいなものだったのね。だって、コウノトリが赤ん坊を運んでくるみたいにして、あたしたちをこの家につれてきてくれたんですもの。」

というとおり、ガムおじさんは、まさに三人の姉妹にとって、いのちの恩人といわねばならない人だったからです。

ところで、このガムおじさんはとても有名な人でした。世界でも指おりのりっぱな化石を、たくさん収集していたのです。

化石の収集なんて、なにがおもしろいんだろう、と思う人もあるでしょう。しかし、あつめている人にとっては、切手のコレクションなどと同じで、むちゅうになってしまうほどのことなのでした。

化石をあつめれば、それをおいておく場所が必要になります。それでおじさんは、クロムウエル通りの家を買ったというわけです。この家には大きなへやがいくつもありますし、地下室までいければ六階建てになる、りっぱな建物なのです。この家のほとんどのへやに、おじさんはぎっしりと化石をならべました。

さて、そのつぎに必要なのは、この家をきちんととりしきって化石の世話をする人ですが、それもすぐに見つかりました。というのは、ガムおじさんのただひとりのおいが、ちょうどそのころ、妻と小さなむすめをのこして死んでしまい、おじさんは、のこされた未亡人とむすめのシルビア、それに乳母のナナの三人を、この家にひきとることにしたからです。

それから十年して、その未亡人も亡くなりました。しかし、そのときにはもう、むすめのシルビアが十六歳になっていました。彼女は、ナナに手伝ってもらいながら、亡くなった母親のかわりに、家と化石の世話をすることになりました。

ガムおじさんはあいかわらず、せっせと化石を持ちこんでいました。家の中が化石でいっぱいになると、ナナがこぼします。

「ねえ、シルビアおじようさま。うちにある化石を、すこしどこかへやってからでなければ、新しい化石を持ちこむのは困りますって、おじさまにおっしゃってくださいな。」

シルビアは、そんなことをいうのはいやでした。しかし、いやだといえ、ナナといいあらそいになっしまいました。しかたなく、シルビアはナナのいうとおりにしました。

けれどもガムおじさんは、シルビアのたのみをきいれようとはしません。

「わしの生きているあいだは、ひとつだって家の外に持ちださせるもんか。」

と、いいはったのです。でも、そんな考えがおしとおせないときとすると、やがて、小さい、あまりよくない化石をえらんで、すこしばかり人手にわたすことにしました。でも、その程度では、ナナの気持ち満足をさせることができるはずはありません。

ガムおじさんは、それから一日か二日のあいだ、ナナのつめたい目と、シルビアの気のどくそうな目をあびながら、家じゆうを、うろうろと歩きまわることになるのです。その結果、とつぜん「ザ・タイムズ紙」に、マシユー・ブラウン教授、つまりガムおじさんが、たくさんの化石を博物館に寄付したという記事がのり、荷箱を持った男たちがやってきて、いちばんねうちのある（ということは、いちばん大きなものをさすことが多いのです）化石を運びだす、ということになるのです。

ナナは、満足そうに吐息をつくとき、化石をおいてあったあとのそうじにとりかかり、シルビアは、ガムおじさんをなぐさめるために、おじさんがこんど化石をさがしにいかうとしているところの説明などを、静かにきいてあげるのです。

このようにして、ガムおじさんは、なんとか化石を博物館に寄付し、また、化石さがしの旅に出る、ということをつくりかえました。が、そのうちにたいへんな事故がおきて、おじさんは二どと化石さがしなどできない体になってしまいました。

ある、めずらしい化石をもとめて、山にのぼったときのことです。おじさんは足をすべらして、高

いがけをころげ落ち、足の骨をひどくくだいてしまいました。おじさんは足を大手術し、歩くのも不自由な身のうえとなつてしまったのです。

(こうなつてはもう、化石さがしの旅に出ることはできない。)

ふつうの人なら、そう考えることでしょう。だけど、ガムおじさんは、そんな人ではありませんでした。

ある日、おじさんはシルビアに、こうはなしかけました。

「わしは、陸地の旅はずいぶんしたが、海の旅はほとんどしたことがないんだ。それで、こんどは船で世界じゅうを見てまわることにした。なにかおもしろいものが見つかったら、持つて帰るからね。」すると、そばからナナが、きつい口調で口をはさみました。

「そんなことはなさらないでください、だんなさま。いまのままでも、家の中はいっぱいなんですからね。くだらない象の彫りものだのなんだのは、もうたくさんですよ。」

「象の彫りものだと？ いいかい、ナナ、世界には、うっとりするようなすばらしいものが、たくさんあるんだよ。そのどれかを持つて帰るかもしれないのに、それをなんだ、象の彫りものだと！」

ガムおじさんは、さげすむような口ぶりで、そういいかえました。でも、ナナも負けてはいません。「けっこうですとも、だんなさま。そのすばらしいものとやらを、だんなさまがごじぶんひとりでこ

らんになるのは、すこしもかまいません。だけど、持つて帰られるのだけはごめんです。この家には、もうよぶんなものをおくゆとりはございませんから。」

そんなやりとりをしてガムおじさんは出かけましたが、その、おじさんが持つて帰ったうっとりするほどすばらしいものというのが、なんと、ボーリンだったのです。

おじさんののっていた船が、旅のとちゅうで氷山にぶつかり、しずんでしまいました。乗客はみな、ボートにのりうつてのがれましたが、夜にはいつて、そのうちの一そうに水がたまり、乗客たちは海になげだされてしまいました。すぐさま、おじさんのボートが助けにきました、その場につい

たときには、すでに、みんなおぼれ死んでいて、ただひとり、救命具にゆわえつけられた赤ちゃんが、まるでゆりかごにゆられているかのように、たのしそうに、クツクツとわらっているばかりでした。

ガムおじさんは、その赤ちゃんをボートに引きあげると、コートにくるんでだきかかえました。やがて通りかかった定期船に、おじさんたちは救いあげられましたが、そのときになって困ったことが起こりました。というのは、赤ちゃんの身もとがわからず、引き取り人をさがすことができないということでした。

みんなは、身よりのない女の子だけをあずかってくれるホームに入れたらいいいいましたが、おじさんは、それには反対で、じぶんが引き取るといいはりました。おじさんは、見つけたものはなん

